

# 海上保険の存在を証明する ペルピニャンの1414年1月10日付け訴状

大 谷 孝 一

## は じ め に

これまでのフランス海上保険史研究によれば、<sup>(1)</sup> 現在のフランスに真正海上保険契約が最初に伝えられたのは15世紀の初頭であって、現在知られる最古の海上保険契約はマルセイユ (Marseille) の1426年のもの(複数)である、というのが定説であった。<sup>(2)</sup>

しかし、その後の研究<sup>(3)</sup>によって、それ以前にもフランスに海上保険契約が存在していたことが明らかとなったが、<sup>(4)</sup> 本稿で取り上げる南仏ペルピニャン (Perpignan) においても、すでに1400年代初頭に海上保険が存在していたことを証明するカタロニア語で書かれた資料が存在する。幸い、この夏、フランスを再度訪れることができた機会に当地をたずね、archiviste の Jules Lagarde

注(1) 木村栄一「フランスにおける海上保険および海上保険証券の生成」(『大林良一博士退官記念保険学論集』pp. 41-71); 拙稿「フランスにおける初期の海上保険契約について」(『保険学雑誌』第479号, pp. 1-23); 拙稿「フランス海上保険史研究——14世紀から18世紀末まで——」(『早稲田商学』第269・270号, pp. 151-188) 等。

(2) 前掲・拙稿「フランスにおける初期の海上保険契約について」p. 6; Edouard Baratier et Félix Reynaud, *Histoire du commerce de Marseille*, T. II, 1951, p. 886, n. 1.

(3) 特に, Louis-Auguste Boiteux, *La fortune de mer—le besoin de sécurité et les débuts de l'assurance maritime*, 1968.

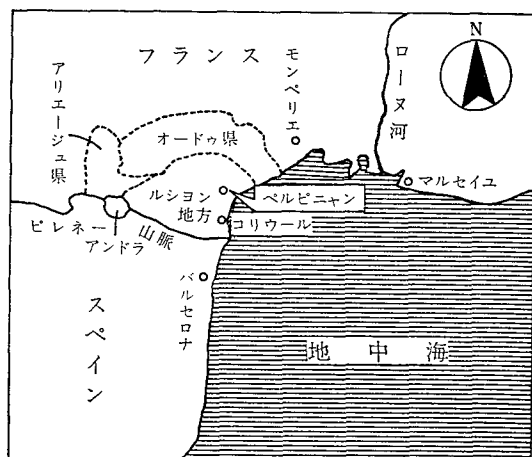
(4) フランスの海上保険史研究については、更に別稿を用意している。

氏の通常の常識を超える程度のご援助により、当地の県立古文書館 (Archives départementales des Pyrénées-Orientales) に保存されている現物のコピーを入手することができた。帰国後も、同氏よりたびたび親切な私信をいただいているので、この機会に本誌の紙面を借りて、この資料を訳出紹介し、同氏のご恩に報いたいと思う。

## I

当地ペルピニャンは、以下の地図に見る通り、南仏ルシヨン (Roussillon) 地方の中心地であり、ピレネー山脈の北側に位置し、北をオードゥ (Aude) 県、西を隣国アンドラ (Andorre) とアリエージュ (Ariège) 県に囲まれ、東は地中海に面するスペイン国境の県ピレネー・オリアantal (les Pyrénées-Orientales) の県庁所在地である。同市は人口約 104,100 人,<sup>(5)</sup> 現在、ブドウ酒・野菜・果物の輸出港として活気づいている。

歴史的に見ると、同市は10世紀初頭には記録に現われており、ルシヨン地方



ルシヨン地方を中心とするフランス南部

注(5) Petit Robert 2, *Dictionnaire universel des noms propres*, 1978.

を統治するアラゴン (Aragon) 王の所領に属し、13世紀にはマリョルカ (Majorque) 王の首都となった。

したがって、ベルピニャンの属するルシヨン地方は歴史・文化・言語の面からはカタロニア (Catalogne) の一部を構成し、1659年のピレネー条約によってフランスに編入されるまでは、スペイン領であった。<sup>[6]</sup> またルシヨン地方は、地中海から大西洋への商品 (毛織物・香料・铸铁・珊瑚・皮革など) の輸送路にあたるため、ベルピニャンは古くから要衝として栄え、かつてはバルセロナ (Barcelone) に次いで、カタロニア第2の都市として当時の地中海世界に知られていたのである。<sup>[7]</sup>

## II

このように、ベルピニャンがカタロニアの一都市として長らくスペイン領に属していたところから、同市の県立古文書館に眠る多数の記録の中から発見された1414年1月10日付けの訴状が、カタロニア語で書かれていたとしても、驚くにはあたらない。

以下に、Lagarde 氏の協力を得てようやく探し当てた同資料の現物の写真とその活字文、および拙訳を掲げよう。

Al molt honrat lo batlle de la vila de Cobliure ho a son lochtenent. En P. Ginis, consol de la mar de la vila de Perpenya, en Bernat Martror, lochtenent del honrat N'Enrich de Rodos, l'altre consol de la dita vila. Salut e prosperitat. Notifican a vostra saviesa que comparent devant nos en G. Fabre, cambiador de la dita vila. A nos ha sposat que com ell havia fet contracte migansant corraters ab En Arnau Auriol mercader de la dita vila per lo qual contracte

注(6) 小林一宏訳『J. ビセンス・ビーベス——スペイン——歴史的省察』(1977年, 岩波書店), p. 255, n. 4.

(7) 小林・前掲訳書, p. 87.



lo dit G. ab la nau Spillala, de Collioure fins en Palerm de la illa de Cicilia ha assagurades al dit Arnau Auriol CCL lliures per preu de XV lliures. E lo dit Arnau Auriol, segons lo dit G. afferma, no vulla al dit G. les dites XV lliures pagar, jatsia request. E sobre asso siam per lo dit G. requests que y vulla prevehir de remedi de justicia condecet. E imperamor de asso a instant lo dit G. per auctoritat del offici nostre de consolat del qual usam en aquesta part en subsidi de dret nos requerim. e de la nostre vos pregam que de part nostra manets ho manar fagats al dit Arnau Auriol, lo qual a present es en la dita vila de Cobliure, que do e portes al dit G. ho a qui ell volra les dites XV lliures, ho en altre manera divendres primer vinent comparegua devant nos per alleguar justes rahons per los quals no y sia tengut. e no res menys a tots actes juridichs procehins d'aquest fet fins a sentencia deffinitiva, ab cominacio que en altra manera nos procehirem en lo dit fet segons com sera de dret e de raho, offerins no appellats per nos per semblant coses e majors. Data en Perpenya a X del mes de janer en l'any de la nativitat de Notre Senyor M. CCCC XIII.

[同 訳]

「Collioure 市の非常に尊敬すべき裁判長殿、 またはその代理官でありベルピニャン市の海事裁判官である P. Ginis, 同市のもう一人の海事裁判官である尊敬すべき Henri de Rodos の代理官 Bernard Martror の諸氏に。恵みと繁栄を。

同市の両替商 G. Fabre は、同市の貿易商 Arnau Auriol と契約を締結し、それによって上記 G. は、船舶 Spillala 号の積荷につき Collioure からシンリー島のパレルモまで、15リーヴルの金額をもって、250リーヴルの保険を上記 Arnau Auriol に与えたこと、および上記 Arnau Auriol は、上記 G. が確認したところによれば、請求を受けたにもかかわらず、G. に対して上記15リーヴルを支払おうとしなかったこと、をわれわれに説明するた

めに、上記 G. がわれわれをたずねてきたことをお知らせ致します。そしてこのために、われわれは適正な裁判によって、この15リーヴルを賠償してくれるように、上記 G. から要請されております。このために、また上記 G. の訴訟書類に基づき、かつ、われわれが法律問題に関して利用するわが海事裁判所の権限によって、上記 Arnau Auriol に対し——彼は目下上記 Collioure 市に住んでおりますが——以下のことを命じていただきたい。あるいはわれわれが命じることをお許しいただきたいと思います。すなわち、彼は上記 G. に対し、または上記 G. が欲する者に対し、上記15リーヴルを支払い、または人をして支払わせること。またはさもなければ、彼が従わない正当な理由を申し立てるために、次の金曜日にわれわれの前に出頭すること。

かつ、それにもかかわらず、われわれは……<sup>(8)</sup>に従って、最終的な判決を得るまで（関連ある）一切の法律行為を開始するであります。

キリスト生誕1414年1月10日、ペルピニャンにおいてこれをしたためる。』

以上の拙訳からも分る通り、これはペルピニャンの貿易商 Arnau Auriol に対して、約定の15リーヴルを支払うよう命じてほしいという（恐らく原告 G. Fabre の代理人によって書かれた）海事裁判所宛ての訴状であろう。原告 G. Fabre はペルピニャンの両替商であって、本件では保険者として、コリウール（Collioure）（ペルピニャンの南 27 km にある地中海に面した港町）からシシリ島のパレルモに向かう船舶 Spillala 号で運送される積荷について、保険料15リーヴルをもって保険金額250リーヴルの保険を被保険者 Arnau Auriol に提供したが、この Arnau Auriol が約定の保険料額15リーヴルを支払わないため、訴えとなったものである。

---

注(8) 特別の訴訟手続きであろうが、訳出できない。なお、カタロニアの海上保険事件に関する訴訟手続きの詳細については、加藤由作『レアッツ欧州海上保険法史』, p. 253 et suiv. 参照。

この G. Fabre と Arnau Auriol との契約はまさに積荷の航海保険契約であって、<sup>(9)</sup> 本資料は保険契約書そのものではないながら、15 世紀初頭に、この南仏ペルピニャンの地で、すでに真正な海上保険契約が行なわれていたことを示す立派な証左である。

本資料以外に、ペルピニャンにはもう一つの資料が存在するが、それはずっと時代が下って、1632年9月8日のものである。<sup>(10)</sup>

### III

ここで、スペインの初期の海上保険契約について簡単に付言しておこう。

周知の通り、現在、スペインで知られる最古の海上保険証券は1402年のものであるが、スペインでは、保険契約はすでに1300年代の後半には行なわれていた。<sup>(11)</sup> 事実、マルセイユの県立古文書館 (Archives départementales des Bouches-du-Rhône) には、1378年の訴訟記録が残されており、それによれば、アヴィニョンの商人 Andrea di Tissio が、その代理人であるルッカ人の A. Prohanta に対して、マルセイユ向けの8袋の緋色の種子を本人のためにバルセロナで保険に付けるよう依頼していた。保険者はカタロニア語で Luquin Scalampa (または Scarampa) と呼ばれていたが、実際はその兄弟の Barthélemy と同様、バルセロナに移住したジェノヴァ人であった。<sup>(12)</sup>

前記1402年の保険証券はラテン語で、公証人によって作成されたものであるが、これは Bernard Pratz の船舶によって南仏エーグ・モルト (Aigues-Mortes) からアフリカのアレキサンドリア (Alexandrie) 向けに運送される

注(9) Boiteux, *op. cit.*, p. 91 は、本保険契約における保険の目的を Collioure からバレルモまで運送される鉄の積荷であるとしているが、はつきりしない。

(10) この1632年9月8日の契約書によれば、保険者は Delfau や Oriola と名のるペルピニャンの商人であった。——*cf.* Boiteux, *op. cit.*, p. 91.

(11) Boiteux, *op. cit.*, p. 89.

(12) Boiteux, *op. cit.*, p. 89.

155 壺の油に関するものであった。被保険者は Francesco de Manelli, 保険者は Andrea de Pazzi で、ともにフィレンツェ人である。<sup>143</sup>

また、公証人 Mermany なる人物が作成した1428年4月12日付けのカタロニア語の保険証券がある。<sup>144</sup> これは、Jehan de La Torra がヴァレンシア (Valence) 向けに、イギリスでジェノヴァ船に積込んだ2梱包のラシャについて、バルセロナのラシャ商人 Jean Font が付けた保険に関するものであって、保険者は Pierre Marie, Jean Clossi, Jean Albo, Jean de Pallars および Jean Thome であった。彼らはバルセロナの市民であったが、一人はドイツ生まれ、数人はイタリア生まれの商人である。<sup>145</sup>

さらに、ナポリの歴史学者 Mario del Treppo は、バルセロナの古文書館 (Archivo Histórico de la Ciudad de Barcelona) の記録の中から、公証人 Masons によって作成された1428年7月10日から1429年12月20日までの380件に及ぶ一連の海上保険契約に関する書類 (Libro de seguros maritimos) を発見している。<sup>146</sup>

この書類中には100人の保険者が見出されるが、そのうちイタリア人は20人で、しかも彼らだけで契約の3分の1を引受けていた。<sup>147</sup> フィレンツェ人が一番多く、メディチ家の Francisco や Fantino を初めとして、Frescobaldi, Giovanni Ventura, Tosinghi, Galvano de Salviati 等がいた。次いでジェノヴァ人で、Geronimo Grimaldi, Francisco Salvago, Barnaba Centurione,

注143 Boiteux, *op. cit.*, p. 89.

144 Boiteux, *op. cit.*, pp. 89-90; André-E. Sayous, *Les transferts de risques—les associations commerciales et la lettre de change à Marseille pendant le XIV<sup>e</sup> siècle* (Revue Historique, 1955), p. 508 et suiv.

145 Boiteux, *op. cit.*, pp. 89-90. なお、本保険証券の原文については、木村栄一『ロイズ保険証券生成史』pp. 194-196 参照。

146 Boiteux, *op. cit.*, p. 90; 木村・前掲書, p. 191.

147 Boiteux, *op. cit.*, p. 90.



Tomaso Imperiale, Giovanni Grillo, Rafaele Giustiniani 等である。さらに, Canyoly, Botxi といった二人のルッカ人や Filippo Aldighieri なるピエーサ人の名前も見られる。

しかしながら, バルセロナには, Johan de Torralba, Gaspar du Vat, Filippe della Cavalleria, Luis Sirvent, Joffe Sirvent, Jean des Guez 等カタロニア人保険者もすでに多数おり, 彼らの中には, 大商人ばかりではなく, 船主, 小売商人, 両替商, ラジャ商人等も含まれていたという。<sup>118)</sup>

#### IV

以上述べてきたところから, 次のような結論を下すことができよう。

すなわち, 中世カタロニア第一の都市バルセロナでは, すでに1300年代の後半から海上保険契約が行なわれ, 多くのカタロニア人保険者が存在していた。また, ペルピニャンの属するルシヨン地方は1659年までカタロニアの主要地方としてスペインに属し, アラゴン連合王国の統治を受け, 言語・風俗そして恐らく法制<sup>119)</sup>に至るまでスペインそのものであった。

したがって, 同じ南仏の都市モンペリエ (Montpellier) がイタリアから保険契約を伝授されたのと異なり, このペルピニャンには, 保険はバルセロナから伝えられたと考えるのが妥当である。<sup>120)</sup>

(本稿は早稲田商学研究基金の援助による研究の一部である。)

注118) Boiteux, *op. cit.*, p. 90.

119) 例えば, バルセロナ侯ラモン・ベレンゲール一世老王 (1035~1076) が制定した「カタロニア慣習法典」の適用範囲を考えてみればいい。——小林・前掲訳書, p. 56 および p. 252, n. 3 参照。

120) Boiteux, *op. cit.*, pp. 91-92.